様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　11 日現在

機関番号：34310
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010　～　2012
課題番号：22652063
研究課題名（和文）　複数の歴史認識における史料を媒介とした新しい歴史記述の方法論的研究
研究課題名（英文）　A Methodological Study of New Historical Writings Based on Materials of Multi-Historical Consciousness
研究代表者
冨山　一郎（TOMIYAMA ICHIRO）
同志社大学・グローバルスタディーズ研究科・教授
研究者番号：50192662

研究成果の概要（和文）：
本研究では、ある地域において歴史的意義を担っていた史料を別の主体にかかわる歴史記述において読み直すとき何が問われるのかということを、史料読解にそくして検討した。また歴史認識における地域史や辺境史と日本史、あるいは植民地史と帝国史の違いや対立を、歴史史料の読解を通じて検討し、どちらか一方を他方へと還元しない新しい歴史記述の方法を具体的に提示した。

研究成果の概要（英文）：
In this study I considered how we should re-read historical materials which have been playing historical significances in each regional society. Moreover I considered the conflicts and differences of historical consciousness between marginal regions and nation-state or colonies and empires, so that I present concretely new historical writing to avoid such reductionism based on binary idea.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	0	1,100,000
２０１１年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	480,000	3,180,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：住民運動・歴史認識・感情記憶・郷土史・沖縄現代史・奄美現代史

１．研究開始当初の背景

研究開始当初の背景として、第一に、歴史における感情の問題が、いわゆる日本近代史における植民地支配をめぐる日本と旧植民地であった地域との対立として登場しているということがあった。だがそれだけではなく、沖縄史、アイヌ史、在日朝鮮人史といった領域と日本史との間においても、その対立は存在した。たとえば日本思想史研究者の孫歌はこうした歴史における感情の問題を「感情記憶」として問題化しているが（孫歌『アジアを語ることのジレンマー知の共同空間を求めて』）、そこでの要点は、感情を学的客観性や理論的次元へと置き換えることでは

なく、継続的な討議空間を生み出すことにある。こうした歴史における「感情記憶」の問題は、多くの場合市民参加のシンポジウムや討論会などにおいては決して目新しいことではない。本研究ではこうした歴史認識にかかわる討議の場を、たんに専門家による啓蒙の場とするのではなく、討議によってなされる集団的な歴史記述の可能性を探る場として検討しようとした。

第二に本研究は、歴史研究のみならず人類学などにおいても問題にされた記述者と被記述者の関係にかかわる理論的な検討にもかかわっている。たとえばサバルタン・スタディーズ（崎山政毅『サバルタンと歴史』参照）や人類学における批判理論の登場など（Ｊ・クリフォード他『文化を書く』など）、この１０年来の人文学における理論的展開も、本研究の背景としてある。そこで登場した、対面的関係の重視や、精神分析学の応用、記述行為の遂行的意味といった論点は、最初に述べた具体的な討議空間をどのように考えるのかという問題に直結している。ただ、本研究ではあくまでも史料読解においてこうした理論的課題を具体的に問題化しようとした。

第三に、研究代表者は本研究の連携研究者とともに、すでにこうした問題意識にもとづいて各地域で史料を読む会を１０年以上続けてきた。それは、沖縄在住の郷土史家、北海道在住のアイヌ史研究者、奄美在住の郷土史家たちと、沖縄、北海道、奄美といった場所において恒常的に討議する場をつくりながら、それぞれの地域を超えた横断する歴史記述の可能性を具体的に探る活動だった。本研究はこうしたこれまでの活動を背景にしている。

また第四に、研究代表者は大阪大学グローバルＣＯＥプロジェクト「コンフリクトの人文学」の中心的メンバーであった。そこでは今日世界的に広がる歴史認識の対立や和解について検討したが、歴史学の分野からの具体的な提言はすくない。本研究は平和学や国際関係学における和解をめぐる研究動向とも重なる。

２．研究の目的

本研究の目的は、歴史記述をめぐる「感情記憶」の対立が顕在化する場所においてこそなしえる歴史記述の方法を、提示することであった。こうした目的において、具体的には、次のことを具体的目的として設定した。

一つは歴史記述をめぐる複数の恒常的な討議空間を生み出し、こうした場所の中で生まれる議論の成果を、史料集としてまとめることである。すなわち、一つに統一された歴史記述ではなく、具体的な史料をめぐる意味の違いとして前述した「感情記憶」の問題を表現するような史料集を作成することを目的とした。この史料集は、単に歴史学的に重要な史料を集めたものではなく、一つ一つの史料が、なぜその場において意味を持ち、保存されたのか、保存あるいはされなかったのかということに踏み込んだものになる。

また第二に、この史料集の作成を通じて、新しい歴史記述の方法を提示することを目指した。また本研究は、いわばこれまで歴史学においては学術的とは見なされなかった感情の問題を正面から扱うことを目的とした。

以上のようなこうした試みには、たとえば前述の沖縄・琉球史をめぐる議論や近年では日中韓三国による共通歴史教材を作る試みがあるが（日中韓三国共通歴史教材委員会『未来をひらく歴史-東アジア３国の近現代史』）、本研究はこうしたこれまでの試みをふまえながら、世界的に展開している「歴史をめぐる和解」に明確な具体的提言を行なうことをめざした。

３．研究の方法

本研究では、沖縄、奄美、北海道の国内地域と、台湾、韓国といった東アジアの国外地域において、在地史料の発掘とそこでの研究者や郷土史家たちとの史料をめぐる恒常的な討議空間の設定を、プロジェクトの基本的な活動とした。また適宜、京都もしくは大阪において地域横断的な史料の検討会議を設定した。史料とそれをめぐる討議はそのつど記録し適宜公開し、最終的には地域をつなぐ横断的な史料集の作成をめざしたのである。こうした本研究の方法並びに計画にもとづいて、板垣竜太（同志社大学）、駒込武（京都大学）、北海道立アイヌ民族文化センター研究員の小川正人、鳥山淳（沖縄国際大学）をはじめとする地域に根ざした研究者の参加を要請した。また新たな史料集作成ならびに、集積した知識発信の形態、また非専門家との連携をめぐるアドバイザーとして、岩波書店編集部の小島潔、南方新社社長の向原祥隆を、研究協力者として参加を求めた。以下その具体的活動を記す。

（１）沖縄調査、討議。

沖縄県立公文書館、琉球大学、沖縄県立図書館郷土資料室における史料調査、ならびに石垣島における米軍占領下における台湾出身者にかかわる史料調査を行った。とりわけ石垣島では石垣島役場の担当者との意見交換などもふくめ米軍占領下における入国管理制度についての聞き取り調査を行った。また那覇では、上記の鳥山淳氏ら沖縄在住の研究者の参加をもとめ、沖縄現代史の諸論点について討議を行った。またその討議の場には上記の小川正人氏ならびに駒込武氏をアイヌ研究、植民地主義研究の専門家として、ま

たさらに岩波書店編集部の小島潔氏を史料編集にかかわる専門家として参加を求めた。

（２）奄美調査、討議。

鹿児島県立図書館奄美分館、並びに名瀬教育会館における松田清文庫を中心に史料調査を行なうと共に、名瀬に住む郷土図書の書店を経営する森本眞一郎、郷土史家の佐竹京子らとともに、討議の場所を設定し、史料の討議をおこなった。またその際、奄美関係資料の多くを手がけた上記の南方新社の向原祥隆の参加も求め、地域における史料集の刊行の意味についても検討した。討議の場には、鳥山淳氏、小川正人氏ならびに駒込武氏を沖縄現代史研究、アイヌ研究、植民地主義研究の専門家として参加を求めた。

（３）北海道調査・討議

北海海道立文書館・北海道大学付属図書館などで資料調査をしたほか、北海道在住の研究者の報告を受け、討論をおこなった。報告者の選定に関しては、上記の小川正人の他、研究協力者として山田伸一（北海道開拓記念館学芸員史)、奥田統己（札幌学院大学）と相談して決めた。

(4) 東京会議。

討議のための史料集の具体的編集をめぐって、東京で岩波書店編集部の小島潔氏を交えて会議を開いた。

(5) 京都会議

各地での調査・討議をうけて、京都において上記の板垣、小川、駒込、鳥山らと新しい歴史記述をめぐるワークショップを二カ月に一度のペースで開催した。

４．研究成果

本研究は、これまでにない新たな歴史史料の読み方を提示した。すなわちそれは、単一の正しい歴史ではなく、複数の固有の歴史の存在を認めた上で、その対話の可能性を、史料を読むという営みにおいて追求するというものである。そこには、以下の二つの領域横断的な試みが存在する。

第一に近年の理論的試みとして、歴史学のみならず人類学や社会学、あるいは文学において議論されてきた言語行為をめぐる関係性の問題である。こうした問題は、言語行為論ならびにフロイトの精神分析学などを人文学全般に応用する傾向として登場してきているが、人文学にそくしていえば、記述者は被記述者と記述するという行為においていかなる関係性を遂行的に生み出すのか、その遂行的意味と記述内容はどのよう連関しまた対立するのか、という問いが、いわゆる学の客観性への批判として登場している。しかしこうした批判は、いまだに抽象的な理論的営為としてのみ展開しているといえる。本研究はこうした動向に対して、史料を読むという行為において他分野のこうした理論的課題を統合しながら分野を横断し、具体的に記述の可能性を検討した。

第二に、本研究において目指した史料読解をめぐる対話の可能性は、いいかえれば専門家と非専門家を横断する知の探求ということでもあった。これまで学会とは区別されてきた市民との対話や証言集会は、アカデミアの外に位置づけられ、専門的知識を啓蒙する対象とされてきた。しかし本研究ではこうした非専門家の場とアカデミアを横断する知性を、具体的史料を介して構築した。そこでは、正しい知識の伝達というよりも、歴史に対する異なる個々の感情を、対話と討議へとコーディネイトしていく知が追求された。またこうした知性の問題は、同時に研究成果の社会に対する発信にも関わることであり、学知が社会において果たす役割を検討することでもある。さらにまた、歴史史料の市民への公開や展示、あるいはアーカイブの作成など近年の社会と大学あるいはアカデミアの関係をめぐる具体的な課題への取り組みでもあるだろう。こうした問題についても、そこでは何が史料になるのか、その史料はどのような形で保全されなければならないのかという点について、具体的に検討した。

また本研究の原理的、方法論的展開は以下の二つの方向においてなされた。

第一に、本研究の課題は、日本の人文学において戦後啓蒙を中心的に担ってきた戦後歴史学の大きな転換と深くかかわっている。すなわち、専門家が民衆を啓蒙するという形で社会との関係を担ってきた歴史学をはじめとする人文学の転換である。戦後民主化の中で、人文学的学知は啓蒙という役割を担うことになり、戦後知識人という層を生み出した。こうした学知の社会的意味を象徴する知識人像や論壇状況は、とりわけ歴史学においては、戦後民主化ということが唱えられなくなって久しい今日においても大きくは変化していない。本研究では、上から下へ流れる一方的な啓蒙ではなく、いわば討議の場や議論をコーディネイトし新しい関係を生み出すための技術的な知とでもいうべき側面を見出し、発展させることを追及した。

またこうした試みは、同時にこれまでにも存在した知の系譜の再評価にもつながるだろう。たとえば技術的な知を重視した戸坂潤の思想や戦時期の技術論、戦後においては在野研究者、市民によって展開した「思想の科学」研究会の活動、あるいは「思想の科学」にもかかわった梅棹忠夫の『知的生産の技術』など、アカデミアの傍流あるいは外として存在する系譜を掘り起こし再評価していく作業としても本研究は存在した。また史料読解の議論をコーディネイトしていく知として、共同研究の持つ可能性も関係性を生み

出す知の問題としも具体的に検討した。
　第二に、戦後日本の学知という問題以外にも、こうした技術的知への注視という傾向は、現在多分野ですすみつつあるが、こうした潮流をふまえて歴史記述の可能性を明らかにした。たとえば社会実践と社会調査がかさなる社会学におけるアクティブ・リサーチや、人類学者のＤ・グレーバーが主張した、生きている場における関係の生成に重点をおいた人類学的知性の重要性、あるいは芸術学における即興的な関係性を生み出す技術としてのアートへの注視など、本研究は、他分野のこうした動向と連動しながら、こうした動向を取り入れた実験的な歴史記述について検討した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10　件）
1. 冨山一郎「巻き込まれるということ」(ハングル)『Ｒ』vol.4、韓国＜スユ＋ノモ＞研究所、査読無、2012、pp.16-28
2. 冨山一郎「沖縄をめぐる危機の文化について」『翰林日本学』２１号、翰林大学、査読無、2012、pp.1-21
3. 冨山一郎「沖縄戦トラウマと冷戦」（ハングル）『韓国学研究』２８号、韓国仁荷大学韓国学研究所、査読無、2012、pp.81-97
4. 冨山一郎「戒厳令について」『日本批評』第７号特集、ソウル大学日本研究所、査読無、2012、pp.80-113
5. 冨山一郎「民族主義とルンペン・プロレタリアート―沖縄における脱植民地化と冷戦の間」冨山一郎・田沼幸子編著『コンフリクトから問うーその方法論的検討』大阪大学出版会、査読無、2012 年 3 月、pp.89－122
6. 冨山一郎「公的知識人と連結のための知―生成のプロセスを共有するということ」（ハングル）『東方学志』156 号、延世大学校国学研究院、査読無、2011 年 12 月、pp.107－129
7. 冨山一郎「『基地の島』における民族の問題―領土と身体」（ハングル）『間 SAI』10 号、International Association of Korean Literary and Cultural Studies、査読無、2011 年 5 月 31 日 pp.95-127
8. 冨山一郎「伊波普猷『南島史考』をどう読めばよいのか」『奄美郷土研究会報』査読無、42 号、2011、p.139-146
9. 冨山一郎「記憶という問題、あるいは社会の未決性(openness)について」（ハングル）『The Journal of Localitology』（釜山大学 Korean Studies Institute）査読無、No.3、2010, 4, pp.211－242
10. 冨山一郎「歴史経験、あるいは希望について　　冨山一郎・森宣雄編『現代沖縄の歴史経験』青弓社、査読無、2010、pp.218-232

〔図書〕（計 2　件）
1. 冨山一郎『コンフリクトから問う―その方法論的検討』（共編　田沼幸子と）大阪大学出版会、2011、196
2. 冨山一郎『現代沖縄の歴史経験』(共編・森宣雄と）青弓社、2010、417

６．研究組織
(1)研究代表者
冨山　一郎（TOMIYAMA ICHIRO）
同志社大学・グローバル・スタディーズ研究科・教授
研究者番号：50192662